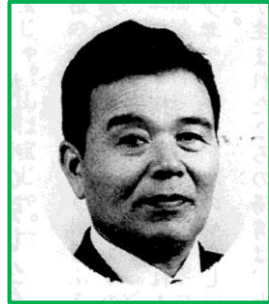




25・26号では、田検生まれで「心から島と子どもを愛した渡武彦さん」(『郷土の先人に学ぶ第4集』)の中で「渡武彦さん」のことを先田光演さんが執筆)のことを紹介しました。

今回は湯湾生まれで、「自然を愛し豊かな村づくりに積極的に取り組んだ松元辰己さん」のことを紹介します。



松元辰己さんのことも、平成5年12月に発行された『郷土の先人に学ぶ第4集』の中に書いてありました。この本の中で、藤野幸正さんと前田英一さんが二人で「松元辰己さん」のことを詳しく書いています。本に書かれている内容をもとにして、どの学年の子どもにも分かるように紹介します。

1 好奇心の強い少年 ～なぜ? どうして?～

松元辰己さんは、大正4年5月31日湯湾集落に七人兄弟の二男として生まれ、昭和61年12月22日に71歳で亡くなりました。

子どもの頃は大変おとなしく、心優しい、兄弟思いの子どもでした。その頃の湯湾は、今よりも大変活気があるにぎやかな集落でした。特に農業や林業が盛んで、港には定期船がたくさん停まっています、シイタケや木炭、鉄道用のまくら木などの積み出しが毎日盛んに行われていました。

辰己少年は、暇さえあれば港へ出かけ、積み出し作業をじっと見つめていました。そして、「あん船や、何の力で走るんかい?」とか、「シイタケはどこで栽培しゅんかい?」「木炭は、どんなにして焼きしゅんかい?」「あん荷物は、どこへ運びしゅんかい?」などと、いろいろな質問を次々に父や母、働く大人たちにしたそうです。

辰己さんは、いろいろなことに「なぜ?」「どうして?」という疑問を抱き、それが分かるまで人に聞いたり、自分で調べたりするととても好奇心が強い少年だったようです。

また、やらなければならない家の仕事や勉強は、何があっても必ずやり遂げる責任感の強さももち合わせていました。

2 山はみんなの宝 ～山の恵みが生活の支え～

高等科(今の中学2年の年齢)を卒業すると、毎日、両親と山や畑に出かけ農業の手伝いに汗

を流しました。当時の農業は、機械などもなく今よりももっと厳しい仕事でした。

ある時、辰己さんはこんな弱音を吐きました。

「なんでこんなきつい仕事をせんばならんのかい。」

それを聞いた父親は、仕事の手を休め、山を見上げながら辰己少年にこう言い聞かせました。

「山や畑は、わたちの生活を守ってくれるんだ

お。こん村は山のおかげでこんなに栄えてきた。大事に守らんといきやんどお。山は村の宝どお。」

額から大粒の汗を流しながら鍬を振り下ろす父の姿を見ながら、辰己さんはつぶやきました。

「山は宝じゃ。山は…、山は宝じゃ！」

少年時代の父との山仕事をとおして辰己さんは、自然の恵みとその大切さ、そして村民の生きる支えになっている農業や林業の尊さ、人々を思いやる優しさを学んでいったのです。この体験が、辰己さんの政治家としての道に大きな影響を与えます。

この後、長崎県佐世保の海兵団に入隊。持ち前の好奇心と熱心さで、若くして次々と高い技術を身に付け、上官や部下からも厚い信頼を得た辰己さんは30歳の若さで海軍特務少尉にまで昇進しました。

3 くだもの作りの名人 ～アイデアと粘り強さ～

昭和20(1945)年の終戦を迎えた辰己さんは、兵役を退き、家族と故郷の湯湾に移り住みました。

病気がちな奥さんを支え、5人の子どもを育てながら朝から晩まで農業と林業に精を出しました。しかし、働いても働いてもいっこうに生活は楽になりません。生涯の中で一番苦しい時代でした。

それでも辰己さんは、決して弱音を吐かずにシイタケ、サトウキビ、バナナなどの栽培に来る日も来る日も一生懸命取り組み続けました。親から譲り受けた山を切り開いて畑にし、作物の性質をよく研究しながら栽培を続けたのです。

その苦労の甲斐あって、辰己さんの栽培するバナナは、他の人が育てたバナナよりも高くで売れるようになりしました。大きくて、房の数も多く、傷ひとつない立派なバナナが実るようになったのです。

「どうして辰己のバナナは、あんなによくできるんかい?」と、他の農家の人たちは不思議でなりません。それには辰己さんのアイデアがありました。バナナにぼろ布をかぶせ風に当たらないようにし、肥料として牛の糞を使いました。人が考えつかないうような事を考え出し、重なる失敗にもめげずに粘り強くがんばり抜いた末、見事なバナナが実ったのです。辰己さんは、苦勞してあみ出したその方法を湯湾の人々に気軽に教えていきました。(文責:福田